

始まりと終わりの地

川 野 美 智 子

学生時代から断片的ながら読み継いできた T. S. エリオットの作品研究に一応のけじめをつけたいと願っていた。数年前に『四つの四重奏曲』第三曲の舞台米国マサチューセッツ州ケープ・アンを訪ねた後機会を窺っていたが、昨年ようやくイギリス南西部を旅する際に、残り3曲の舞台を訪ねたいと思った。

紆余曲折の末、足を運ぶことのできたサマセット州南部のイースト・コーカーは、エリオット家の祖先が17世紀のアメリカ移住まで代々住んできたところであり、父祖の地に帰り着きたいと願ったエリオットが眠るのもこの地であった。美しい五月の晴天の下なだらかな丘陵とさまざまな色調の緑の木立の続く中を、夕刻ようやくイースト・コーカーに着く。萱葺きの農家の点在する小さな村である。すでに門が閉ざされていたチャーチを横に見て今夜の宿に向う。トマス・グレイの「墓辺哀歌」そのままに、ねぐらに向う牛たちを斜めに照らす夕日がペンテコスタの火を思わせる。ペンドーマ・ハウスという名の B & B はかつての牧師館だという。広い敷地のなかの三階建てのいかにも牧師館然とした壮大な建物が浮き出してみえ、往年の隆盛振りが偲ばれる。翌朝再び訪れた教会の門は開きチャペルの戸も開いていた。

〈わが始まりの中にわが終わりあり〉〈わが終わりの中にわが始まりあり〉詩篇「イースト・コーカー」の最初の行と最後の行を具現したチャペルの外に出る。大きなイチイの木がチャペルを覆うばかりに繁り、一面に広がる墓石の半ばはケルト十字である。ほとんどの墓碑銘は薄れて読むことができない。「故郷は出発の場所」といいつつ、詩人は「古い墓石の生涯」つまり今はこの地に眠る昔の人の生き方に自分を合わせる人生をこれからの己に課そうとする。17世紀の動乱を生き抜き今は敵味方なくこの地に眠る人々に思いを致しつつ、

エリオットは20年後にこの地に埋葬された。願い通り始まりと終わりを全うした人生であった。

エリオットのひそみに倣うべくもないが、今、私にも始まりと終わりへの思いがある。神戸に生まれ中高生時代をここで送った私が、初めて学びの道への心躍る志をもったのは京都においてであった。哲学、東洋史学、西洋古典、言語学その他の碩学の講義に、学問の魅力が惜しみなく分かち与えられるようであった。空き時間には高校時代の旧師の研究室を訪ねて海洋科学や地球物理の話を伺ったりもした。ぼろピアノに群がる仲間たちと現代音楽を論じた。卒論をきっかけに、あるテーマについて研究し書くことに無上の喜びを感じた。再び京都に通うようになったのは、二、三の大学勤めを経た後である。旧師先輩のお導きのおかげで今日の私が在る。志の始めの土地で終わりの十余年を全うし得たことは感謝に耐えない。

佛教大学では、博士課程創設時に勤務を許されて以来、大学院・学部・通信制の多くの学生さんたちと楽しく学ぶことができた。激しい英語教育の変革の嵐の中で、広い意味での「ことば」と「文」を大事にする最後の拠点のように感じた。先輩の先生方の寛容と学生たちの真摯の賜物である。終わりの場での心豊かなつながりは終生続くかも知れない、と片思いながら考えている。またしてもエリオットの詩行が想起される。

We shall not cease from exploration

And the end of all our exploring

Will be to arrive where we started

And know the place for the first time.

出発点は初心のありかである。今は懐かしい幼時を私たちは心の奥底に焼付けている。

At the source of the longest river

The voice of the hidden waterfall

And the children in the apple-tree (“Little Gidding”)

終わりの地を光輝あるものにしてくださった佛教大学と関係の皆様は心からお礼申し上げる。